

学生会員の 声

●環境破壊は駄目だと誰が決めたのか●

高校まで韓国で卒業し、大学から日本へ留学した私にとって最初に韓国との違いを感じたことは飲酒に対する年齢制限であった。私が韓国にいた時、お酒は19歳になる年の1月1日から飲むことができた。誕生日が違っててもその年に19歳になる人は全員飲むことができるので、今思うと少し不思議な気もする。しかし、当時はそれが私にとって当たり前のことだった。1月1日から皆お酒を飲めるようになるため、大学に入学すると同じ学科の先輩や同期との飲み会が開かれ、飲み会を通じて親しくなるのが一つの文化として位置づけられていた（早生まれは当てはまらないが）。一方で、日本は誕生日が過ぎて20歳になってこそお酒を飲むことができるので、大学に入学してもお酒を飲めない人が多かった。一見当たり前で大事したことのない違いのように見えるが、大学生になると誰もがお酒を飲むことができると当たり前のように思っていた私にとっては大きな違いに思えた。自分にとって当たり前であることがそうでないことを初めて実感したからである。そして国によって違う飲酒に対する年齢制限はどのような基準で作られたのか気になり調べたところ、それらに通底する根拠は特にないことが分かった。考えてみれば当然なことだ。昨日まではお酒を飲めなかった人が、今日突然お酒を飲めるというもおかしい。18歳は駄目で19歳からは急に飲めるのもおかしい。その時に世の中のルールは人間によって任意に決められたもので、まるでゲームの中キャラクターのように人は仮想のルールの中で生きていたと感じた。

実際に私たちは仮想の世界に住んでいる。紙に価値を与えお金と決めれば紙を大切に、石や木を集めて城を作ると石と木を大切に思うようになり、地球の表面に線を引いて国とするとその表面に愛国心が生まれる。今まで重要だと考えてきたことがすべて人によって仮想的に作られたも

のだった。昔は王族に生まれると王になり、貴族に生まれると貴族になり、平民に生まれると平民になり、奴婢に生まれると奴婢に生きていくことが当たり前のことだった。100年前には子供でも働くことが当たり前だったが、今は子供に働かせることは犯罪である。20～30年までは先生が生徒に体罰を与えるのは当たり前だったが、今では暴力や虐待を考えられ、すべての体罰が禁止された。このような道徳観念、いや、いかなる観念も、人がいくら重要で当たり前になっていることも、結局人の頭の中に仮想的に存在し、その仮想は時代が変化して環境が変わればすぐ変わってしまう。

一方で、科学法則は変わらない。昔も今も、千年前も千年後も、1億年前も1億年後も重力は変わらず存在する。人間が作った仮想のものとは違って、変わらず存在する。

人間が作った常に変わる仮想の世界とずっと不変である科学がある中で、工学というのは科学を使って仮想の世界を良くする学問だと思う。しかし、時には、仮想のものに支配されて人を殺したり、国の間で戦争が起きたり、理由もなくほかの人を敵にすることもある。仮想を仮想として楽しむ時私たちは幸せになれるが、仮想に支配されてはいけないのではないか。そのために、特に科学の知識を用いて仮想の世界を変える工学では、仮想と科学の両方を学ぶ必要があると考える。しかし、学部からこれまで私が学んだ工学は、科学だった。時代と環境によって、また、立場によっても変わり得る仮想の世界については学ぶことも、議論することもなかった。そういうことを議論しようとしても無視されるばかりだった。あるワークショップに参加してグループワークをする機会があった。その時私たちのグループでは、環境を守るのが当たり前という考え方に疑問を持って、議論を進めたことがある。例えば、環境を守ることは今の世代より未来の世代を優先するようにも捉えられると考え、それについて議論したことがある。グループ内ではかなり盛り上がったが、そのワークショップを開催している先生からは無視された覚えがある。その人にとって環境を守るのは当たり前だったのであろう。

工学におけるいかなる研究も社会的観念からフリーではない。社会的観念は見えない制約条件として常に存在する。

その社会的観念について議論し、何故その観念ができたのかを理解することは科学を正しく使い最適な道を導き出すためにも重要だと思う。いくらそれが当たり前であっても。

(東京大学大学院工学系研究科化学システム工学専攻 金 俊佑)